

風を見ていたひと

回想の吉屋信子

吉屋えい子



風を見ていたひと

回想の吉屋信子

吉屋えい子

風を見ていたひと ● 回想の吉屋信子

一九九二年十月十日 第一刷発行

吉屋えい子（よしや・えいこ）

一九三八年、横浜に生まれる。文化学院を経て、
六九年、オランダ・ハーグ市の自由美术学院陶芸
科入学、以後オランダに住む。

七四年、ロッテルダム市立美术学院陶芸科入学。

七五年、聖ヨースト美术学院陶芸科入学。

七六年、ロッテルダム陶芸作家展でデビュー。

以後ヨーロッパ各地で陶芸活動を開始。

八五年、走泥社展出品。

八七年、銀座和光にて個展。

八九年、英国に移住、現在にいたる。

著 者 吉屋えい子

発行人 橘 弘道

印刷所 図書印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社

〒一〇四―一一 東京都中央区築地五―三―二

電話〇三―三五四五―〇一三一（代）

編集・書籍第三編集室 販売・出版販売部

振替・東京〇―一七三〇

© E/Yoshiya 1992 Printed in Japan

ISBN4-02-258520-X

定価はカバーに表示してあります

目次

風を見ていたひと

主のいない書斎 8

再び、主のいない部屋で 21

風を見ていたひと 31

ある日の寸劇 37

最後の出逢い 45

紙の服 57

父の家

祖父を語る父 60

古屋家の“女” 65

最初の引っ越し 68

三匹の仔山羊 71

父と西洋石鹼	73
変身	76
父の決断	79
幻の家	84
百合の花	86
影絵のオカッパ	90
私の見た星	94
揺りもどし	98
別れ	103
オランダの窓	
オランダの窓	108
スヘーヴェニンゲンから	112
さくら丸への贈物	116
赤い煉瓦の自転車道	125

女の園 133

風が耳にしみる 146

めぐり逢い 151

英国の窓

海にきく 162

月にきく 167

花柄、そして花柄 173

イングリッシュ・ブルー 177

英国の窓 181

紅茶と探偵小説 184

窯の音 193

時の迷路

一枚の写真 198

姉と弟 203

ある悲恋 209

赤いサルヴィアの絵 216

時の迷路 221

樹の記憶 228

あとがき

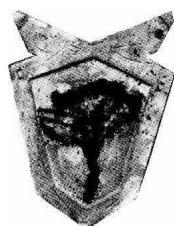
風を見ていたひと

● 回想の吉屋信子

装幀 多田 進
カバー・カット

吉屋えい子作「仮面の壺」

風を見ていたひと



主のいない書斎

叔母吉屋信子の鎌倉大仏裏にある谷戸の家を私が父と訪ねたのは、まだ小学校に上がるか上がらないかのころだった。

そのころ、私は気に入りの象の形をした灰色のビロードのハンドバッグを買ってもらい、外出のたびによく持ち歩いていた。千葉の農業試験場のような所へ父が一泊二日ほどの出張をしたとき、私はその象のバッグを提^さげて汽車に乗り、初めて父と二人だけの旅をした。

父は当時、個人で研究所を営んでいた。小さい私を連れて行ったのは、引っこみ思案だった私に、いささかの社会勉強の機会を与えたいという、父らしいかんがえからだったと思う。すぐ上の姉は、時どき“社会見学”の名のもとに父の軽い仕事の旅に同行させてもらったというから、私もそろそろ連れて歩いてもいいような年齢に達していたということであつたろう。

小心だった私の性格は、もうそのころすでに現れていた。見知らぬひとたちのなかに座って次つぎと移り変わる窓外を眺めながら、私は旅に出たことの興奮よりも家から離れたころもとなさ、寂しさなどのほうが強くて、あまり座り心地はよくなかった。

乙女椿の垣根に囲まれた丘の上の家で、母がいまごろは膝を折り、糠袋ぬかざくらで廊下をピカピカに光らせているだろうと、ふと思ひ出したりすると、（自分だけ汽車に乗って、愉しい思いをして……）とうしろめたい思いに苛さいなまれたりした。

家にいるときには、そんなことを思ったこともなかったのだから、家のなかにおける母の「位置」を客観的に見することができたというだけでも、父が私を外に連れ出したことの意義はあったというべきであらう。

父は試験場の事務所のストーブのそばで、温和な風貌の男のひとと話をはじめた。そのひとが私にピーナツを沢山くれた。その殻つきの豆が家で食べるのよりはるかに美味しくて、私は帰りの車中でついに腹痛に見舞われてしまった。父の忠告を無視して食べつづけた罰だと知っていたので、私は父には黙っていた。

汽車の洗面所に行く私に、最初るときはついてきて使用法など教えてくれた父も、あとは、「自分で行ってごらん」と言うだけだった。これも当時から依頼心の人一倍強かった私に、独立心を養わせようとした父の配慮だったと思われる。

父は私が子供心に自分のしたことを後悔しているのをよく知っていて、「ほら、ごらん、だから言ったではないか……」などと、わかりきったことを口にしたりしなかった。ただ、私が身をもって体得したことで十分だと思っていたようだった。

そのような父の生き方は、後年、他人に騙されたりする負おとのほうにも作用したが、それは父の、ひ

とを信じ、ものごとをよいほうに肯定してかかる天性の気質であり、言ってみれば大正という時代に育ったひとの優雅さだったのかもしれない。

父に連れられて大仏裏の叔母の家（別宅）に行ったときも、私はおなじ象のハンドバッグを大切にうに持って行った覚えがあるので、父と千葉方面へ行ったのとはおなじころだったのではなからうか。

記憶の扉は、とある邸のまえから突然に音もなく開くのである。

幼い娘を連れした父親がその邸のまえにたどり着く。父親は邸の門からはいらず、柴折戸からなかにはいって行った。

サッサと歩いて行く父の後ろから、私はもの珍しそうに庭を眺めながら、おずおずと——それでも後れまいとして父の後について行った。

初めて見る叔母の家の庭の、ハッと息をのむようなひらけた明るい感じは、私にはまさに別世界だった。小川のような水の流れがあり、玉砂利が光り、水辺には黄色い菖蒲かアヤメの花が真っ盛りだった。

私の横浜の家の瓢箪池のあたりには、母の好みを映して地味な迷彩色のシャガの花などが咲いていた。原色の花は私にはなじみがなかったので、叔母の家の庭を浮き立たせる大胆な花の黄色は際立って豪華に映った（私の記憶はいつもこのように“色”とともにある——と言うよりも、何色かの色の

思い出のなかに塗りこめられている)。

父は縁側の踏台の上に靴を脱ぎ、つかつかと上がりこんだので、私はそのような父の態度を、ずいぶんお行儀がわるい、おかしいナ、とさえ思った。

「おまえも上がっていいんだよ」

と言うなり、父はもう障子を開けて自分の家のように部屋のなかにどっかと座りこんでしまっていた。私は外に取り残され、象のハンドバッグを持って立っていた。「これから行く所は叔母さんの家だよ」と聞かされていたにもかかわらず、ためらいがあった。

どこからか女のひと——従姉妹が出てきて、

「千恵ちゃん(私の実名)、お上がりなさい」

と言ってくれ、靴を脱ぐのを手伝ってくれた。この顔見知りの道明伯父の娘である従姉妹の突然の出現が、腑に落ちぬと同時に私を安堵させもした。

座敷の父は、従姉妹の母である色白の和服姿の女性と向かい合って話していた。私がお辞儀をする、そのひとは微笑んで私に何か話しかけてくれた。十分優しいのに、どことなくぎこちなかった。

お茶と和菓子も勧められた。私はこの初対面の日以来、この女性とふたび逢うことはなかったが、このひとから受けた異様な感じをいまだに忘れることができない。その後、むかしの物語など読む年ごろになって「妖怪」ということばに出会うと、私はあの日の女性の白い顔に揺らめいた微笑と重ね合わせたものだった。

居心地わるそうにしている私を従姉妹が部屋から連れ出してくれた。廊下の突き当たりの部屋のまえまで行くと、従姉妹は、

「ここが信子叔母さまのお部屋よ」

そう言つて静かに戸を開けた。

私は怖いものでも見るように、そつと奥まつた部屋のなかをのぞいてみた。

部屋には誰もいなかった（そこは昭和十四年に信子が母マサの隠居所として建てた最初の鎌倉の家だった。当時は信子の二番目の兄の一家が、祖母のマサと一緒に住んでいたということを、私は後になって知った）。

年長の従姉妹が、叔母がそこにいない理由をなにか言つたが、私の心は別なものに囚われていた。

部屋の畳の上に新聞が広げたままになっていた。

その部屋は、水辺に黄色い花がカッと咲いている広い庭の優雅な印象とちがひ、質素で、ものを書くには明度もたりず、冷ややかな気配さえ漂っていた（その部屋は時おり東京からやってくる叔母が書斎として使っていた、作家の密室だったのである）。

私はただその主のいない部屋に広げられた新聞を、ふしぎなもののようにいつまでも見ていた。畳の上に広げて置かれたままの形を止めてのさばる新聞は、無造作であればあるほど生きもののようになましく意味ありげで、子供心にも気味がわるかった。

読みかけのまま、それをそのままにして立ち去ったひとの息づかいが乗り移ったかのように、密室

の畳の上に這いつくばっていた白黒の新聞は、私たちが戸を閉めればソツとうごきだすのではないかとさえ思われた。

実際にはほんの短い間だったのだろうが、私が新聞の広げられた主のいない部屋を見て現実から遊離していたのは、とても長い時間だったような気がする。従姉妹にうながされて次に見せてもらったのはどこだったろうか……。

浴室のあたりで誰かひとの気配を感じたのを覚えているが（事実、私は姿や顔はおぼろげながら一人の男を垣間見ている）、勝手口にきていたご用聞きだったかもしれない。

祖母だったら私はもつとはつきり覚えているはずである。高浜虚子が、「美しき老刀^{とじ}自なりし被布艶に」と句に残した祖母の顔貌には、一度会ったら忘れられないような強烈な個性というか、西欧人的アクの強さがあるからである。

その日は、伯父にさえ対面した記憶がない。伯父も祖母もいなかったあの広い邸に、父はいいいかなる目的で私を連れて訪ねて行ったのだろうか――。

主が不在の部屋は、ときに主以上にそのひとを語るものである。その日は私がもの書きとしての叔母信子の存在を初めて感じ、認識した記念すべき日となった。

私の姉たちもよく夏を過ごしたというその大仏裏の家には、昭和二十年に東京・牛込の信子の家が空襲で焼けてから終戦まで、信子が住んだ。きょうだいで相談のうえ、山形県の鶴岡に疎開していた末弟夫婦のもとに避難させていた母を迎え入れるため、信子は二年後に四畳半の離れを建て増して、

母との同居生活にはいった。母の客が多いこともあって、信子は一、二月の寒いころや多忙なおりは、熱海の「露木」や湯河原の「加満田」に行つて仕事をした。

翌年には、建築制限ぎりぎりの狭い坪数ながら、敷地内にもう一棟の家を建て、次兄夫婦がそこに住んで高齢の母を見守る態勢を整えている。私が幼い眼の底に留めたあの家は、そうなるまえの原型の姿だったことになる。

厳格で口やかましい夫に仕えてきた祖母の晩年には、流行作家となった娘の手厚い物心両面の庇護のもと、着飾つて好きな観劇に明け暮れる悠々自適の日々が用意されていたのであった。育て上げた六人の子のなかで、もっとも意に添わなかった一人娘が出世頭となったからこそ実現した安楽な老後だった。祖母はその娘を宝と思い、誇りにもしたが、同性の恋人と暮らす作家としての彼女の生き方までを認めたわけではなかった。

この訪問から数年経たある夜、私はものごころついて初めてホンモノの叔母信子を見た。

それは昭和十八年ごろ、忠明伯父の長男が出征するのを見送るために一族が集まった歓送会の席だった。三人の姉たちは渋い赤地に白い糸の花模様が浮き出た揃いの服を着て行つた（これが一族が生きて一堂に会する最後の宴になろうとは誰が想像しえたであろうか。その後、あちこちに疎開、離散した兄弟たちは、戦後、それぞれ都会にもどつてからも全員が再会することはなかったのである）。

父の他の兄弟たちも、みな子供連れで出席していた。私には初対面のいとこたちも多かったが、長男貞一家の従兄弟、坊主頭の神経質そうな少年の姿、クリクリした短い髪型のよく似合っていた叔母